

教育と出版におけるスワヒリ語の地位

タンザニアの場合

竹村 景子

はじめに

タンザニアの言語政策は、しばしばブラック・アフリカの諸国のなかで抜きん出ていると評されている。たとえば、フロリアン・クルマスは、その著書『言語と国家——言語計画ならびに言語政策の研究——』（山下公子訳 岩波書店 1987年）で、「タンザニアはどの国よりも決然としてスワヒリ語の発展に心を砕き、この20年間の政策を堅持した。……このことばは、間違いなくそれほど遠からぬうちに、近代国家国語に不可欠な意志疎通手段としての役割を十分に果たせるようになるものと思われる。つまり、タンザニアは、効果的言語計画の好例となったわけである」（182ページ）と述べている。このような意見がよく聞かれる中で、客観的資料をもとに、スワヒリ語の地位を憂慮する人々も存在する。また、*Africa Events* (1988年2月)に掲載された、S・ヤーヒャ・オスマン(Yahya-Othman)の“*When International Languages Clash*”（「国際的言語同士が衝突する時」）という論文が発端となり、有識者の間で、一体タンザニアにとって本当に重要な言語は何かを問う、「英語—スワヒリ語論争」が約1年間にわたって展開された。本稿ではこれらの事実を踏まえつつ、「国語」であるスワヒリ語の現状について、タンザニアの言語政策と民間レベルでの文化活動、特に「教育」と「出版」に着目しながら、その問題点を述べていきたい。

1 「教育」の現状

タンザニアの言語政策が「成功している」と評される大きな理由としては、小学校課程の教授用言語を徹底してスワヒリ語と定めていることが挙げられる。一教科としての「英語」を除く全教科をスワヒリ語で教えるシステムが導入されたのは、アルーシャ宣言が出された1967年（ザンジバルでは、64年から実施）である。7年制の小学校教育の中で、スワヒリ語の授業数はかなり多くなっており（たとえば80年の資料では、3年次には週13時間、7年次でも5時間であった）、他教科についても、スワヒリ語で書かれたテキストの整備が積極的に進められている。

しかし、小学校教育とは打って変わって、中学校以上の高等教育機関では、スワヒリ語が教授用言語となっているのは、「スワヒリ語」や「政治教育」といった、ごく限られた教科のみになっている。このことについては、1969年以来、高等教育においても、教授用言語を英語からスワヒリ語に転換させようという動きが国内にあり、政府レベルでもそのためのプロジェクトが、69、70、74、79、82年と5回にわたって計画されてきたのだが、いくつかの障害があるために、計画は保留されたままになっている。タンザニア国内の言語学者や教育学者が指摘する第1の障害は、政府自身がこの転換に消極的で、その政府の態度が「植民地遺制」に端を発するものであるということである^{*1}。教育においては英語がまだまだ支配的言語であり、高等教育を受けたエリート層や政府高官の間にはびこる、スワヒリ語に対する否定的な態度は依然

として一掃できていない、との指摘もある*²。つまり、英語はエリートのための言語であり、スワヒリ語は英語のように国際的な役割を果たす言語ではないので、高等教育の教授用言語をスワヒリ語に転換することは、タンザニア人のための「外界への窓」を閉めることになる、という植民地時代から根強く残っている偏見によって、スワヒリ語は教育における絶対的な地位を得られずにいるということである。

ところが、現在のタンザニアの言語使用状況を調査した結果*³が示すのは、今やタンザニア国内の言語使用におけるスワヒリ語の力は、英語を凌ぐものになっているという事実である。日常会話においてはもちろんのこと、政治、行政、司法、マスメディアといった多くの分野において、もはや英語は「第二言語」の立場から単なる「外国語」へと、その地位を格下げされていることも読み取れる。問題は、英語の地位の低下だけに留まってはいない。小学校での英語テキストの不足は深刻であり、文部省編集の*English for Tanzanian Schools*という教科書は、タンザニア全体で71%にも及ぶ小学校で使用されているにもかかわらず、教科書1冊を8人の児童で使っているような状況である。他の教科書については、教師用しかないものがほとんどである*⁴。また、クリッパーとドッドが1984年に、国内の全教育課程から無作為に選んだ2410人の児童、生徒に対する「英語習得に関する調査」を行なっているが、その結果を見ても、現在の高等教育は改善しなければならない点を数多く抱えているという指摘ができるとと思われる。たとえば、「調査対象の中学校の生徒全体を見ても、50%くらいの生徒が、ほとんど、あるいは全く、授業内容のわかっていない科目がある、英語を教授用言語とした場合に十分理解できる能力を持っているのは、4年生のわずかに10%ほどで

ある」*⁵という結果からもわかるように、英語を教授用言語にしていることからもたらされる弊害は、かなり大きくなっている。

これらの客観的資料と、現実の政策、特に教育計画とのギャップについては、知識人の多くが分析し意見を述べており、総じて、高等教育機関の教授用言語の在り方を見直すべきだという指摘をしている。スワヒリ語を高等教育機関の教授用言語にできない他の理由としては、教科書および教師の不足、学術専門用語の未整備などの問題が挙げられる。特に専門用語は、開発の遅れがしばしば問題にされているが、実際、高等教育機関での教授用言語転換がクローズアップされた時期には、さまざまな分野に対応できるように多くの研究者が開発に従事していたのである。ところが、転換が見送られたことにより、それらの用語は言わば宙に浮いた形になり、一部の専門家たちの間に埋もれてしまっているのである。現在、大学のレベルですら、英語で行なわれる講義の内容を学生により良く理解させるために、スワヒリ語で説明補充するといった状況もしばしば見受けられ、使用する機会さえ与えられれば、必ずスワヒリ語の用語も一般に浸透していくと思われる。現実には、児童、生徒の英語に対する興味の薄れ、あるいは学習意欲の低下が問われている状況で、このままの教育体制を続行することには、無理があるように思われる。こういったことから考えても、現在の「教育」と「言語」の在り方に対する、政府の具体的なかつ有効的な対応が要求されていると言えるのではないだろうか。

2 文学と「出版」

次に、「出版」の方に目を向けてみたい。大ざっぱな数値ではあるが、1988年と90年における、新聞、定期刊行物などの平均発行部数をまとめた以

下の表(*AFRICA South of the Sahara*, 1988年, 1990年より)をみれば、概して、スワヒリ語の刊行物の方が増加傾向にあるということがわかる。

たとえば、*Uhuru*というスワヒリ語の日刊新聞は、1988年から90年の2年間で約5倍にも増えており、非常に注目に値する。それとは逆に、*Daily News*という英語の日刊新聞は、3万部も減少している。また、件数でも、英語の刊行物よりスワヒリ語の刊行物の方が多いのがタンザニアの特徴であり、新聞以外の主な定期刊行物(教育、労働、政治等の専門誌など)では、英語による刊行は3割にも満たない。今や、タンザニア国内のどこに行ってもスワヒリ語は通用し、ほとんど100%に近いタンザニア国民がスワヒリ語を理解すると言われていた状況を反映するかのように、マスメディアでのスワヒリ語の浸透度も、かなり高いものと思われる。

ところが、一作家がスワヒリ語で書いた作品を出版しようとする場合、依然としてさまざまな問題がある。たとえば、タンザニアでは社会派の戯曲作品を多く書いていることで著名な、女性作家のペニナ・ムハンド氏は、自らの作家活動に関する問題を、(1)スワヒリ語で書けば(国際的な)読者が減る、(2)出版事情が悪いためになかなか世に作品が出ない、(3)アフリカ人が総じて「オーラル」の文化を持っているために、「読む」という習慣がまだまだ確立されていない、(4)本などを買うよりも、まず生きていくために最低限必要なものを買うなければならないから、一般大衆は本を余り買える状態ではない、とまとめ、これらの問題が重なって、スワヒリ語作家は依然として望ましい文学活動を保障されていないと指摘している*6。紙不足などの経済的問題があることから、出版事情が劣悪であることは以前から知られているが、現在は、むしろ出版社側の態度に問題があることの方が、ス

発 行 物		1988	1990
<i>Daily News</i> (E)	(日 刊)	80,000	50,000
<i>Uhuru</i> (S)	(日 刊)	21,000	100,000
<i>Mzalendo</i> (S)	(週 刊)	115,000	115,000
<i>Sunday News</i> (E)	(週 刊)	80,000	50,000
<i>Kiongozi</i> (S)	(隔週刊)	100,000	103,000

ワヒリ文学の高揚に対する大きな障害となっていないのではないだろうか。出版社の問題とは、言うまでもなく出版遅延の問題であるが、ペニナ氏の場合も、ひどいときには原稿を渡してから6年後にやっと出版され、その時には作品の内容が時代遅れになっていたこともあったようである。

出版社側の問題について、同じくタンザニアの著名なスワヒリ語作家であるサイド・アフメド・モハメド氏に少し詳しく尋ねてみた。Longman Kenya Ltd.発行の*Dunia Mti Mkavu*(『この世は枯れた木の如し』1980年)という小説は、原稿提出から出版までが1年間ということで、これは比較の早かったそうだが、「タイトルの変更」を余儀なくされるというトラブルがあったという。当初著者は、“Wingu la Mwanzo”(「最初の雲」)というタイトルを考えていたというが、内容がかなり社会的で政治批判も多く含まれていたことから、出版社側からクレームがつき、何度か交渉した末、変更なき場合は出版不可能という引導を渡され、やむなく変更したということである。ちなみに、“*Dunia Mti Mkavu*”というタイトルは、著者によると本文の内容とは全く関係がないという。また、印税についても、年ごとに売れた分の10%が保証されているというが、初版の発行が何冊で、そのうちの何冊が売れたかなどといったことは全くわからないようである。編集者の能力や考え方についても問題があり、提出した原稿を熟読し、出版に値する作品かどうかを判断することはおろか、英語に比べてスワヒリ語の作品などどうでもいいと考

えている編集者が、驚くべきことに、特に地元、つまりタンザニア国内の出版者に多いということであった。むしろ、Longman Ltd. や Oxford Univ. Press などの外国資本の出版社の方が、スワヒリ語の作品を読む能力を備えた編集者を備えているだろうというのが、サイド氏の見解である。残念ながらこの事実は、昨今国内で叫ばれている、外国資本の出版社に依存せず、国内での出版事業の育成をはかろうという意見に水をさすことになる。このように、国内の言語状況の目立った変化とは裏腹に、スワヒリ語で書く作家の立場、またその作品の置かれている状況は、決して楽観的なものではない。多くのスワヒリ語作家が、このような状況に耐えられずに著作活動を放棄しているという事実もあるようだ。タンザニアでは、スワヒリ語で文学等の作品を書くことは、たとえば初代大統領のニエレレがシェークスピアの『ジュリアス・シーザー』をスワヒリ語に翻訳し、この言語が文学という分野にも十分対応できることを顕示したことからもわかるように、国家的レベルで奨励されているはずのことである。しかし実際には他の民族諸言語の場合と同様、スワヒリ語で書く作家の権利も守られておらず、出版に関する基本的なこともまだ確立されていないような状況であると言える。

おわりに

近年、スワヒリ語は、OAUでの使用言語に、アフリカ大陸全体の共通語に、といった意見も出されるほど、その言語的地位を高めつつある。だが、「成功している」と言われるタンザニアの言語政策も、決して手放しで絶賛できるものではなく、内情はかなり複雑なものである。特に、実際の言語

状況の変化に十分対応していない政府の曖昧な態度には、各方面の専門家たちが苛立ちを覚えている。しかも、スワヒリ語を擁護する意見ばかりでなく、教育における英語の影響力を誇示する意見も聞かれる。いずれにせよ、現状維持はスワヒリ語にとっても英語にとっても好ましいことではないのである。タンザニアは、アフリカ固有の言語を「国語」に選択したとは言え、他のブラック・アフリカ諸国と同様に、旧宗主国の言語的支配を考慮し、さらに他の民族諸言語との関係も効果的に処理していかなければならない。スワヒリ語をタンザニアの文化を担う諸民族統合の言語として、真に前面に押し出していくのであれば、スワヒリ語に課した非常に大きな役割を果たさせるための、より精緻な言語政策を早急に検討すべき時がきているのではないだろうか。

- * 1 C. M. Rubagumya ed., *Language in Education in Africa : A Tanzanian Perspective*, Multilingual Matters Ltd., 1989年, 1～4 ページ参照。なお、本書の全般的紹介については、『大阪外大スワヒリ&アフリカ研究』〔大阪外国語大学アラビア・アフリカ語学科スワヒリ語研究室〕第3号 1992年 45～60ページ参照。
- * 2 D. P. B. Massamba, "Thirty Years of Kiswahili Development in Tanzania," IKR, University of Dar-es-Salaam, 1991年参照。
- * 3 Rubagumya, 前掲書, 11ページ参照。
- * 4 H. M. Batibo, "English Language Teaching and Learning in Tanzanian Primary Schools," Rubagumya, 前掲書, 56ページ参照。
- * 5 Rubagumya, 前掲書, 28ページ参照。
- * 6 竹村景子「スワヒリ語作家の諸問題——ベニナム・ムハンドを例に見る——」(『アフリカ文学研究会会報』〔アフリカ文学研究会〕No.26 1991年) 1～5ページ参照。

(たけむら・けいこ／大阪外国語大学)